

森林遺伝育種学会の設立にあたって

森林遺伝育種学会会長 白石 進^{*1}

過ぎし 20 世紀を象徴する言葉の一つに「知識の世紀」があります。より多くの知識を集積した人、組織、国家が優位に立った時代でした。これに対し、21 世紀は「知恵の世紀」といわれています。

20 世紀後半に始まった林木育種への組織的な取り組みとそれを支援するための様々な森林遺伝研究は、多くの知識・情報をもたらしてきました。また、他の栽培植物の育種やゲノム研究に代表される遺伝学で得られた知識も、堰を切ったように森林遺伝育種に押し寄せています。樹木でも既にポプラやユーカリをはじめいくつかの樹種でゲノムの全 DNA 配列が決定されようとしています。第二世代 DNA シーケンサーの登場で、より容易に全ゲノム情報の解読が可能となっており、多くの樹木で全ゲノムが解明される日もそう遠くはないと思われます。これらは、遺伝育種における知識集積の現状を象徴しているように思えます。

林木育種はその特殊性ゆえに、多くの難問に直面してきました。今日、世界標準となっている集団選抜育種は、林木の特殊性の克服から生まれた独自の育種法であります。他の植物遺伝育種における知識（技術）の単なる模倣ではこのような大きな展開を遂げることはできなかったでしょう。これからも、多くの新しい知識と技術が、大きな期待をもって森林遺伝育種に導入されることでしょう。今後、これらの知識・技術を用いて期待どおりの成果を達成するためには、常に林木のもつ特殊性を忘れることなく、そのブレークスルーに向けた知恵絞りが必要となると思います。新学会が皆様の学会活動を通じてそのお役に立てることを強く願っております。

今日、森林資源利用が急速に拡大する一方で、森林のもつ地球環境保全への貢献が強く求められています。森林の遺伝を取り巻く学術の進展、とりわけ生物多様性の評価や遺伝的構造の解明にはめざましいものがあり、これからの森林の適切な管理と保全のためには森林遺伝学が不可欠であります。また、森林資源の蓄積や環境適応性の増大のためには林木育種学のさらなる発展が必要です。さらに、この両者の統合は、環境保全と資源利用の

調和を図る上でのキーテクノロジーとなることでしょう。森林を舞台に第二の「緑の革命」も夢ではないと思われます。

最後に、わが国で林木育種への組織的な取り組みが始まって以来、林木育種と森林遺伝に関する学術は（社）林木育種協会を核として進められてきました。これまでの同協会の貢献に深く感謝申し上げます。新学会は、このミッションを引継ぎ、さらに発展させてゆかねばならないと気持ちを新たにしています。

* E-mail: sushi@agr.kyusyu-u.ac.jp

¹ しらいし すすむ 九州大学大学院農学研究院